

伝統芸能の継承、 その危機と可能性。 植物性。二つの団体が示す 「新たな普及モデル」とは

多くの伝統芸能は、後継者不足と現代社会における関心の希薄化という共通の課題に直面している。

本資料では、この課題に対する二つの先進的なプロトタイプとして、和太鼓団体「古今楽明座」と「八丈太鼓どんど鼓」を取り上げる。

両者の対照的なアプローチを分析し、伝統を未来へ繋ぐための、効果的で新しい「生態系（エコシステム）」モデルを提示する。



「教育システム」の古今樂明座、「個人の魅力」の八丈太鼓どんと鼓



古今樂明座

リーダー：谷川氏

哲学：体系的な「教育システム」そのものを戦略の核とし、未経験者を育成することで文化の門戸を開く。

キーワード：#システム #教育 #理論 #未来志向



八丈太鼓どんと鼓

リーダー：ムッタ氏

哲学：代表者個人の魅力と現代的な発信力を駆使し、誰もが楽しめる「玄関口」を創出する。

キーワード：#カリスマ #発信力 #楽しさ #コミュニティ

古今樂明座：挫折から生まれた「0から始める和太鼓集団」

「わかちゃんに引き上げてもらった」 - 谷川氏

● 原点

代表・谷川氏はプロ奏者を目指すも一度挫折。スポーツトレーナーとして身体運用を学ぶ中で、音楽経験ゼロの若旅氏（わかちゃん）と出会い、彼を指導する中で再び太鼓への情熱を取り戻す。

● 理念の核心

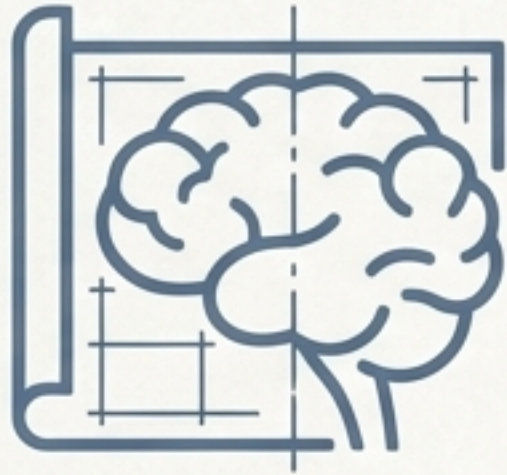
「教える側もまた救われ、成長する」という原体験が、「0から始める和太鼓集団」というコンセプトを生み出す。

● 目的

未経験者の視点に立ち、論理的で再現性の高い指導法を追求。和太鼓を通じ、より多くの人々に「日本の文化の良さを感じるきっかけ」を提供することを目指す。



戦略の核は「教育システム」そのもの。テクノロジーで新たな層を開拓する



教育モデルの確立 (Core Competence)

音楽経験ゼロのメンバーを短期間で舞台に立せるプロセス自体を、団体の教育水準を示すモデルケースとして活用。

プレイヤーの実力だけでなく、教育システムそのものをコアコンピタンスとして提示。



テクノロジーの積極活用 (Outreach)

演目は伝統に根差しながら、立体音響やVRコンサートといった最新技術を検討。

伝統芸能に馴染みのない若者世代の知的伝統芸能に馴染みのない若者世代の知的好奇心を刺激する。



明確なターゲット層 (Focus)

主なターゲットは20代以下の若者や文化体験の未経験者。

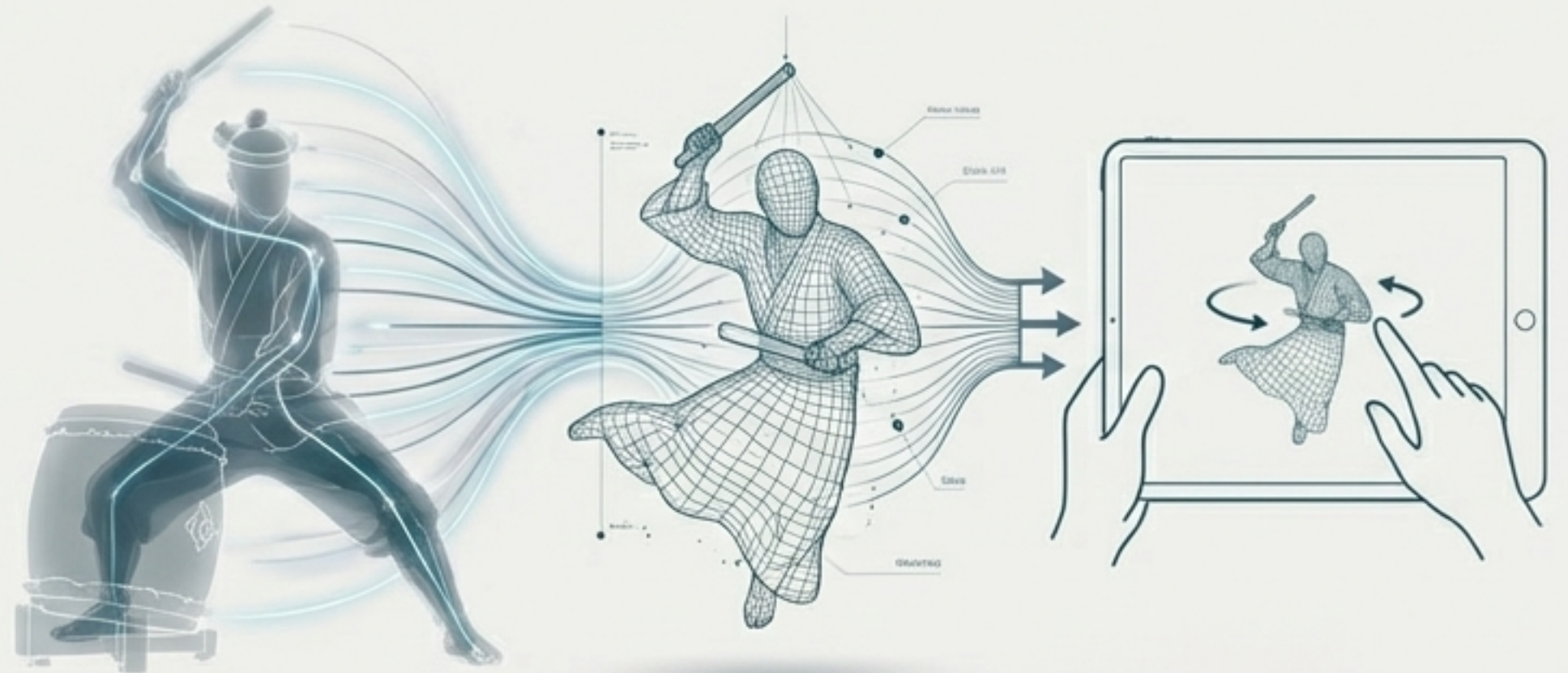
同世代のリーダーが発信することで、共感と親近感を生み出す。

リーダーは理論的教育者。 その先に見据える「民族芸能保管計画」

Leader Profile: 谷川氏 - Educator-Theorist

- トレーナー経験に裏打ちされた理論的指導。
- 演奏を感覚論で終わらせず、音楽理論、身体トレーニング（アスリート要素）、神経科学（脳による制御）から多角的に分析・言語化。
- ハンマー投げの室伏広治選手を参考に、座学も取り入れた再現性の高い指導法を確立。

Future Vision: 民族芸能保管計画



八丈太鼓どんと鼓：「義務感」から「遊び」へ。伝統を再定義する



「八丈太鼓で楽しく遊んでいる」
- ムッタ氏

原点

ゲーム「太鼓の達人」をきっかけに和太鼓を始める。
所属チーム解散時、師から「八丈太鼓を続けてほしい」という
遺志を託される。

戦略的転換

伝統継承を「義務感」で行う「保存会」ではなく、「遊び」の文
脈で捉え直す。このリフレーミングが、格式高いイメージを払
拭し、心理的な参入障壁を劇的に下げる。

理念

「広がる玄関口になればいい」という理念のもと、権威性
ではなく純粋な「楽しさ」を共有することで、八丈太鼓の魅
力を広げる。

YouTubeを戦略的に活用。

「入口コンテンツ」で世界中の視聴者を惹きつける

1. エンターテインメント性の高いキャラクター (Attention)

- コロナ禍を機にYouTube活動を開始。ゴリラのマスクを被るなど、視聴者の目を引くキャラクターを確立し、注目を集める。

2. 「入口コンテンツ」の巧みな設計 (Funnel)

- アニメソング等を演奏する「叩いてみた」動画を、国内外への「入口」として戦略的に配置。
- 興味を持った視聴者を、本来の伝統的な八丈太鼓の動画へと誘導する動線を設計。

3. 間口の広いターゲット層 (Reach)

- 地元の子供たちから、YouTubeを通じて繋がった海外の視聴者まで、極めて広範な層にアプローチ。「玄関口」としての役割を体現。



リーダーは実践的パフォーマー。「緩さ」と「高さ」のギャップで魅了する



Leader Profile: ムッタ氏 - Performer-Practitioner

- 理論よりも「好き」という純粋な熱量を核とするスタイル。
- 自らが誰よりも八丈太鼓を楽しみ、その情熱をパフォーマンスに乗せて発信することで、人々を自然に巻き込む。

Future Vision: 「ギャップ」の最大化

- 壮大なシステム構築ではなく、プレイヤーとしての自己研鑽に集中。
- ゴリラのマスクを被った親しみやすいキャラクター（緩さ）と、卓越した演奏技術（高さ）の「ギャップ」を広げ続けること。
- 自身の存在そのものを、八丈太鼓の最も魅力的な広告塔とすることを目指す。

アプローチの対比：理論の「古今樂明座」と感覚の「どんと鼓」

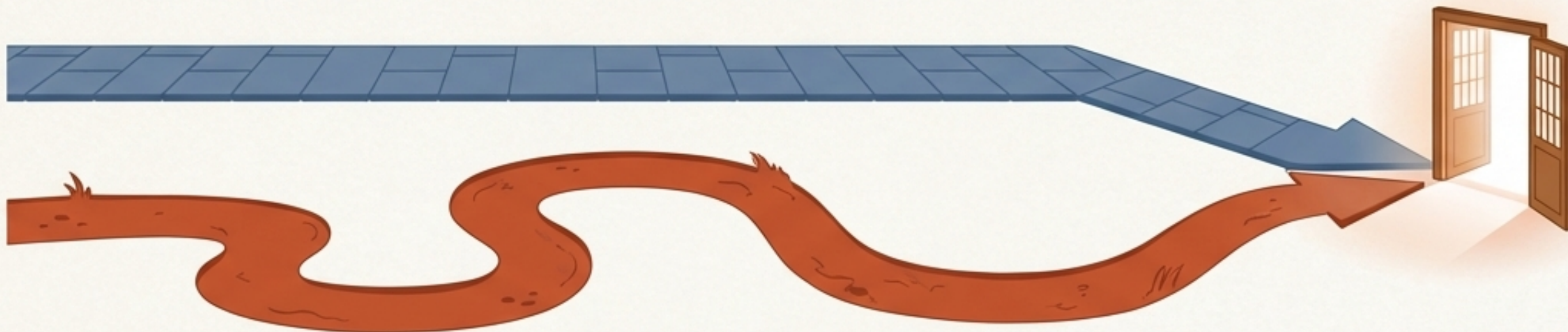
	古今樂明座	どんと鼓
活動のスコープ	 日本の伝統芸能全体の保存・継承	 特定の伝統「八丈太鼓」の普及
中心となる手法	 教育システムの構築とテクノロジー活用	 代表者個人のキャラクターとコンテンツ発信力
アプローチ	 理論・システム主導	 感覚・パフォーマンス主導
主な活動領域	 若者への文化教育、デジタルアーカイブ構築	 地域貢献、オンラインでのファン獲得
リーダーシップ	 理論的教育者 (Educator-Theorist)	 実践的パフォーマー (Performer-Practitioner)



Destination:
Creating an "Entrance" to Tradition

Gakumeiza
(Logical Approach)

Dondoko
(Intuitive Approach)



異なる二つの道、しかし目的地は同じ。 「現代への入口」を創るという共通点

Shared Principles

- 参入障壁の低下: 伝統の権威性を押し付けず、誰もが気軽に楽しめる「きっかけ」や「玄関口」を提供。
- 現代メディアの活用: YouTube, VRなど、ターゲット層に合わせた現代的なメディアを戦略的に活用。
- 「デフォルメ」の肯定: 伝統を現代の感性に響くように面白く見せることの重要性を両者が認識。

Symbolic Insight

当初デフォルメに懐疑的だった谷川氏（理論家）が、ムッタ氏（実践家）の活動を通じてその有効性を認めた。これは、体系的な教育者でさえも、注意喚起型の「入口」の戦略的必要性を認識していることを示唆する。

結論：対立ではなく、補完。健全な文化継承を支える「生態系（エコシステム）」モデル

両者のアプローチは対立するものではなく、一つの健全な「生態系」の中で相互に補完し合う、不可欠な役割を担っている。



ゲートウェイ・クリエイター (The Gateway Creator)

ムッタ氏の役割。個人の魅力とエンタメ性の高いコンテンツで、興味の「入口を広く開ける」。伝統に馴染みのない人々の最初の「一歩」を促す。

パスウェイ・ビルダー (The Pathway Builder)

谷川氏の役割。「入口」から入ってきた人々を本格的に育成し、文化の奥深さへと導く「持続可能な学習インフラを構築する」。

継承サイクルの仕組み：「入口」で招き、「道」で育てる

Stage 1: The Gateway - 興味の喚起



Stage 2: The Pathway - 探求の深化

Stage 1:

役割：ゲートウェイ・クリエイター（例：どんど鼓）

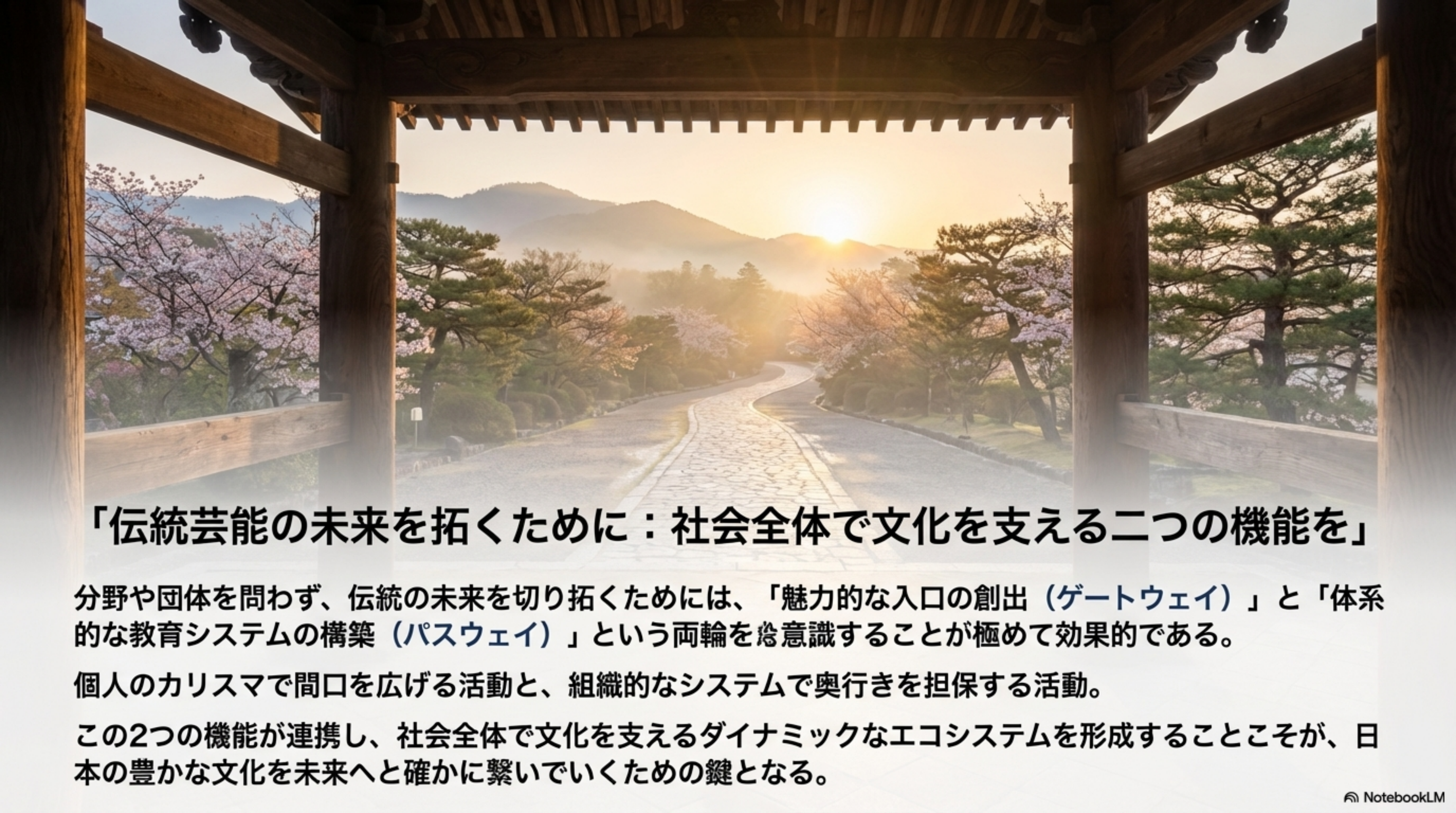
活動：現代的なフック（ゴリラのマスク、アニメソング等）を使い、伝統芸能に馴染みのない幅広い層の注意を引きつけ、最初の「一歩」を踏み出させる。

Stage 2:

役割：パスウェイ・ビルダー（例：古今楽明座）

活動：興味を持った人々を受け止め、言語化・理論化された教育システムやデジタルアーカイブによって、一過性の興味が継続的な探求へと深化させ、次世代の担い手を育成する。

Result: この一連の流れが、効果的な文化の継承サイクルを形成する。



「伝統芸能の未来を拓くために：社会全体で文化を支える二つの機能を」

分野や団体を問わず、伝統の未来を切り拓くためには、「魅力的な入口の創出（ゲートウェイ）」と「体系的な教育システムの構築（パスウェイ）」という両輪を意図することが極めて効果的である。

個人のカリスマで間口を広げる活動と、組織的なシステムで奥行きを担保する活動。

この2つの機能が連携し、社会全体で文化を支えるダイナミックなエコシステムを形成することこそが、日本の豊かな文化を未来へと確かに繋いでいくための鍵となる。